

槐

かい

岡井省二創刊

平成27年6月号

平成二十七年六月一日発行 第二十五巻第六号 通巻第二八八号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



言葉遊び

高橋将夫

春田打つごとくに一句一句かな
自らを律しきれない雪解川
神の手となりしごとくに種選
肌よりも心を濡らす春の雨



欠席者一人もなくて暖かし
遠足の列に昔の我がをる
春愁のマグニチュードとベクレルと
春の闇宇宙の旅は闇の旅
いかのぼり自信なければ揚がらざる
人生に無駄なことなし良寛忌
仮の世の言葉遊びのめでたさよ



槐安集

水野恒彦

蘇るの一語が舞ふよ春の山
思はざる白たへ重ね雪涅槃
黄炎をつくし連翹の此のうつつ
夢殿に立てば満ちくる朧かな
地霊いま昇りつめたる夕桜

加藤みき

忘れ霜世界一周船来たる
花冷や箸の袋に楊枝あり
飯櫃に飯たつぷりと朧月
春光や周章ててガラスみがきたる
青麦や森蘭丸の舞ひ姿



中島陽華

いとうなど跳ねると想ふ懐手
繁昌のハンバーグ屋や山笑ふ
万愚節秩父の石に声あげて
桐灰や淀の水嵩減つてをり
涅槃会や龍角散の飴舐めて

竹内悦子

いかなごや釘に鏽ある道具箱
涅槃西風油の匂ふ印刷屋
鷹の空柴山瀉の浮御堂
雲珠桜見てをる鞍馬大天狗
黄蝶の飛びたる音の遠ざかる

雨村敏子

ぼこぼこと春泥の道熊野まで
行き帰り赤き領布ゆれ蕨山
絹糸を弾いてゐたる余寒かな
雪舟雪舟庭の石の確かさ春の海
丸盆に乗せてゆきたる春の闇

本多俊子

夕星の潤みてしだれざくらかな
沖晴れて馬の鼻筋風光る
花辛夷極上の空たまはりぬ
春の月指先からむ遊びせむ
国生みの神の声して春の波

近藤喜子

横に横に初蝶の空ひるがりぬ
水草生ふ地球もつとも精気満つ
太陽に挑みし椿山めらめら
青麦や性善説を信じをり
天上の静かに歌ふ木の芽かな

瀬川公馨

涅槃西風ふな底てんやわんやかな
セクシーな腰のうねりや春の鯉
春霞実しやかに売茶翁
流水の白群びやくぐん追うてゐたりけり
大池のだまつて雪片白群くらはひけ
白群は群青の顔料を砕いた色

久保東海司

ためらひし手より離れて流し雛
飯蛸の飯喰ひこぼす迷ひ箸
婚の荷の結び目高し春日和
座に運ぶ粕汁湯気を従へて
梅早し衣ずれ耳につく廊下

柳川 晋

鷹化せる鳩に餌を遣る乙女かな
三月のイワンの馬鹿になってをり
霾天や天の岩戸の騒騒し
歴史には残らぬ会話犬ふぐり
偶像を許さぬ民の踏絵かな

岩下芳子

佐保姫の領巾賜りし広野かな
白梅の奥に大聖歡喜天
転勤の知らせ遠くに春の雨
伊賀甲賀一つにしたる春霞
亀鳴くてほんまでつか番頭はん

近藤紀子

思ひがけぬ近さに初音たまはりぬ
廢船が夢をみてをる春の潮
露の臺のてんぷら供ふ忌日なり
鐘臈参道脇の杵に抛る
白梅をたづねたるまま帰らざる

岩月優美子

春霞卑弥呼の影の遙かなり
花山へ行つた切りなり翁かな
落ちてなほ煩惱見ゆる紅椿
小面のこゑの幽かに春の宵
万葉の言霊なびく春野かな

竹中一花

梅一枝置きし丸盆神前に
翠摘む人声松の空にあり
空つぽの刀箆筥や楊柳
ティーカップ並べ春場所番付表
花器前田美恵子様花展に盛る春春春や綾衣



槐市集

柴田靖子

野にいでて春の息吹に昂まれり
見あぐれば星のまばたき春の色
薄氷の悲鳴となりし踏みゆけり
春の霜身を引きしめて明日を待つ
春光や心の目貼剥ぎし時

杉原ツタ子

ひな壇に猫の人形玉子焼く
うたた寝に煌めく湖とさくらかな
奉納の石灯籠や花椿
朧夜の潮のみちひき父のこゑ
さきがけの茶事にありけり梅三分

鈴木初音

人生は否定肯定クロツカス咲く
春愁ふ命鹿末にする果てに
囀りや前後左右に過ぎる風
一面に麦青む世は悉皆仏
料峭や雨の昨日に濡れる今日

高野昌代

頬白の一筆つかまつり候や
春光を分かち合ひたる山と谷
春場所や心滾らす触れ太鼓
鳥を呼ぶ音譜の如き柳の芽
白魚や山河も透かす目に泪



田中 信行

雨ごとに春の匂ひの強まりぬ
春愁や夕暮れに聴くブラームス
鈴の音が重なり合うて猫の恋
春立ちぬジェントルマンを装ひて
待春や王子迎へし地震の町

谷岡 尚美

大落暉裸木並木続きけり
懇ろに交す挨拶雛納め
白酒をつつましやかに飲む娘かな
わだかまり解けてゆきけり春の雪
鎮座する兜煮となり桜鯛

寺田 すす江

ひたひたと波の音する椿山
細胞を入れ替へたしよ春の昼
キューピーはいつも裸や涅槃西風
正も邪も呑みこんでゐる春蘭
満開の桜大樹の烟だつ

時澤 藍

今年またひかり頂く福寿草
斜にかぶり気分一新春帽子
雁帰るわれは見送る役回り
花菜漬絞り加減は味のうち
念ずれば叶ふ気のする梅日和



槐集

高橋将夫選

春陰の重さ蓄ふ門戸枚方熊川 暁子

うららかに齡の嘘の通りけり
百灯に百仏の影あたたかし
木蓮の意志ある白と思ひけり
ロボットが己が影見る余寒かな
自ずから田螺は道を作りけり

大阪 江島 照美

老後とは静かに並ぶ内裏雛
くらべつこなしの人生豆の花
利休忌や傷あればこそ味ありし
色なくも色あるごとく陽炎へる
花ミモザ愛は与へるものと知る
風光る心ふはりと体離れ
一生の一日を桜見て暮れぬ
川底を東風吹くがごと魚群れて
親の夢ふんはり浮かぶ吊し雛

有松 洋子

生きるとは動くことなり春の山岡崎 吉田 順子

考へる蘆の焼かれてしまひけり
春夕焼人逢ふことの罪めきて
光陰の咲かせし枝垂さくらかな
朧夜ややさしき嘘を許されよ
虫出しの雷てのひらの乾きかな

寺田すず江

天よりの召人めしうどとなり紫木蓮
夢はおぼろ朧の中にまことあり
鶴引くや遙けしのぞみ追ひつづけ
春蘭や日の回りけり笑ふなり
身の内の鬼と向き合ふ柚子湯かな
臘梅や死者へ生者へ香を放つ
一閃の木洩れ日はたまた初蝶か
限りある生命を謳ふ黄水仙
紅梅を映して揺るる水の張り

犬塚李里子

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

ロボットが己が影見る余寒かな 熊川 暁子

近年、ロボットはすいぶん進化して、心を癒してくれるロボットも現れている。掲句は子供のような人型ロボットがチヨコチヨコ歩き、立ち止まって、うつむいた実景であろう。「己が影見る」の措辞に注目したい。ロボットは自分自身や影を認識できないし、影を見ようとする意思もない。そんなロボットがまるで影を意識して見ているように感じられるのだ。人工知能が進化して人知を超える時を想像すると身震いがする。

〈春陰の重さ蓄ふ門戸〉の句からは、門戸の重さがズシリと伝わってくる。〈うららかに齡の嘘の通りけり〉はユーモラスで、うららかな心情がほほえましい。〈木蓮の意志ある白と思ひけり〉、白は白紙の白で、全てはこれからの意志の方向にかかっているのだ。〈百灯に百仏の影あたたかし〉は季語の「あたたかし」が効いている。句の姿が実にいい。

色なくも色あるごとく陽炎へる 江島 照美

陽炎に色はない。周囲や背景のゆらぎでその存在が認識されるするわけだが、そのゆらぎ自体が陽炎の色ともいえよう。陽炎の本質に迫る一句。

〈利休忌や傷あればこそ味ありし〉の句。例えば虫食いの果実は虫がつくだけあって美味い。人も苦勞すればそのぶん身に付くものがある。茶道の道を究めながら最期は自刃させられた利休の人生に対する作者の思いが伝わってくる一句。

〈老後とは静かに並ぶ内裏雛〉の句とへくらべつこなしの人生豆の花〉の句、まことに人生はかくありたいと思う。〈自ずから田螺は道を作りけり〉、前の三句も含め今回は人生に深く思いをめぐらす佳句が多かった。

花ミモザ愛は与へるものと知る 有松 洋子

人は誰もが愛されたいと思う。また、「愛は惜しみなく奪う」とも言う。「愛は与へるもの」と素直に言えるのは愛に育まれた作者だからこそと思う。

〈川底を東風吹くがごと魚群れて〉の句は、川底の魚の群れが東風に吹かれて揺れているようだと言う。どうやら川底にも東風が吹くらしい。〈親の夢ふんはり浮かぶ吊し雛〉の句では、吊し雛を「親の夢がふわりと浮かぶ」と捉えた感性に共鳴。

考へる蘆の焼かれてしまひけり 吉田 順子

蘆が焼かれるのを見てパスカルの「人間は考える葦」を連想したところが俳諧。蘆も人もいずれ焼かれて煙となる。なお、野焼きの火で蘆が燃えたのかもしれないが、蘆火(秋)の句とする方が自然。

〈生きたとは動くことなり春の山〉の句は命の本質に迫っている。動かない「春の山」の斡旋も見事。

〈春夕焼人逢ふことの罪めきて〉と〈朧夜ややさしき嘘を許されよ〉の句、どちらも意味深長なところがあって長閑。

夢はおぼろ朧の中にまことあり 寺田すず江

「夢↓朧↓まこと」だという。「絶対」はもろくて、はかない。そして「おぼろ」の中にこそ「まこと」があるのだ。〈以下略〉